

「光は闇の中に」

ヨハネ1章5節

—前 奏—

■開会賛美 讃美歌94「久しく待ちにし」

■主の祈り

■洗礼式（第2）

■説教 ヨハネ1：5「光は闇の中に」

1. 光と闇

アドベント第三週を迎えました。そして今日は3名の方の洗礼式もあります。イエス様の到来によって、私たちは新しいのちに生きることができるようになりました。その仲間たちが増えること、本当に嬉しいですね。

ヨハネ1：5「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」

いよいよ来週はクリスマスを迎えます。救い主イエス・キリストが私たちのためにこの世界にお生まれになった日です。毎年12月になるとクリスマスを待ち望み、そして喜び祝いますが、実はイエス様がお生まれになったのは、正確に何月何日であるのか定かではありません。ですが、クリスマスがこの12月になったのは、今日読みましたみことばと大きな関係があります。イエス様がお生まれになったことによって、闇の中に光が輝きました。そして、もはや闇は力を失い、消えていく運命となったのです。この素晴らしい出来事をこの12月という時期がよく表しているのです。冬至と大きな関係があります。毎年12月21日、もしくは22日が冬至となります。今年は21日です。冬至は一年の中で最も日が短い日です。つまり、冬至の日には物理的に最も暗い一日を過ごします。しかし、同時にこの日は一つの終わりを私たちに告げるのです。それは闇の終わりです。この日を堺に日は長くなっていきます。闇は徐々に消え、光が広がっていくのです。

イエス様の誕生、クリスマスはまさに私たちの闇に終焉を告げる日です。朝と夜、光と闇の中で私たちは生きていますが、同様にこの光と闇は私たちの内面にもあります。嬉しいこと、満足して

いること、生き生きしていることなど、光り輝く時もあれば、苦しい時、悲しい時など闇を通るような日もあります。そして、実際私たちが生きているこの世界は、私たちの日々を明るく彩らせようとするあらゆるものに満ちています。しかし、これらはいつまでも光り続ける訳ではありません。燃えるたいまつがいつか消えてしまうように、一時の明るさを与えてくれますが、永遠ではありません。そして、消えたときに再びくる闇は以前にも増して暗く感じるのです。

しかし、キリストの光は消えるどころか、ますます私たちのうちに輝き、私たちの隅々まで照らしていくのです。このクリスマスの時、私たち一人ひとりは今一度主によって確かにされている出来事に目を開かれます。それは主イエスキリストの到来は、闇を消し去るいのちの光の到来だということなのです。

2. 闇を照らして下さったキリストの光

私自身、神様によって自分の闇が照らされた経験が数多くありますが、昨年特に主の大きな取り扱いを受けた出来事がありました。キリストの光が私のうちにある闇を照らし、私を癒やして下さいました。

私の両親は今から25年前の1995年、宣教師として韓国から日本に来ました。両親が神様から受けた促し、決意は非常に強かったのだと思います。ある日突然「お父さんとお母さんは日本に神様のことを伝えに行く。だけど、兄さんとヒムチァンは連れて行くことができない。」告げられました。父と母の宣教師としての派遣はあまりにも突然過ぎました。当初は家族ビザを申請し、認可されたら行くという計画だったようです。しかし、父と母はその認可が降りるまでの時間を惜しみ、私たち兄弟二人を母方の祖母に預け、3ヶ月の短期ビザを用いて日本へ行ってしまいました。

小学校に入学して間もなく両親がいなくなってしまったのは、まだ幼い私にはあまりにも衝撃的なことでした。本当はすぐにでも家族全員が日本へ移住したかったのですが、ビザがなかなかおりませんでした。そのため両親は3ヶ月の旅費ビザを使って、韓国と日本を行ったり来たりすることで宣教活動をはじめました。ビザが出るまでの間、私と兄は韓国に残り、母方の祖母に預けられることとなり、およそ1年間のおばあちゃんと兄との3人暮らしが始まりました。

この時、祖母との間にあったことをいつかお話したことがあったと思います。祖母は韓国古来の儒教思想を強く持っていた人でして、次男である私に対しての対応は非常に冷たく、厳しい人でした。具体的には、兄と私では食卓にあがる食べ物が違ったり、話しかける口調が違ったりということがありました。しかし、決定的に私を悩ませたのは他のことでした。それは祖母から根も葉もない疑いをかけられ、暴言と体罰を受けたことでした。「なぜ私のお金を盗ったんだ」とか「私の物をどこに隠したんだ」と私を疑い、私は一生懸命誤解を解こうとしていましたが、祖母の疑いと仕打ちには日に日に大きくなる一方でした。誰にも打ち明けることができない、ましてや両親もいない状況でのこの出来事は非常に辛いものでした。

一年後の1996年、家族ビザが出て両親と一緒に日本に来ることができたので、祖母と離れることができました。ですが、この祖母との間にあった数々の出来事は、私の人格に大きな闇をもたらしました。祖母から離れたあとも、祖母から受けた数々の記憶に苦しみ、特に祖母に対する怒りや憎しみは日に日に大きくなって行きました。

私が中学生の時、祖母は危篤になりました。最後の時、家族に連れられて入った病室で祖母に会いました。その時、私はもしかしたら祖母はあの時のことを後悔していて、謝ってくれるかもしれないという望みをかすかに抱いていました。ですが、祖母はもはや私が誰であるかを覚えていませんでした。結局、祖母と和解することはできないまま、祖母はこの世を去りました。

祖母は亡くなりましたが、それでもかつての祖母が私の頭の中に頻りに現れました。特に毎週の礼拝主の祈りの時には必ず浮かぶのです。「私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました」と祈る時、祖母の顔が浮かぶのです。「赦したくても赦せない。」「いや、赦したくない。」そのような複雑な心境でした。しかし、今振り返ると神様は毎週主の祈りを通して、私のこの痛みを取り扱ってくださっていたのだと思います。少しずつ、少しずつ、私の闇を照らしてくださいました。

ある日、神様は私の闇を驚くような形で照らしてくださいました。祖母との出来事が起こってから20年の月日が経とうとしていた時でした。その日、私は東京基督教大学の授業で認知症について学んでいたのですが、ある言葉に心が奪われました。そこには「認知症には物盗られ妄想の症状がある」と書かれていたのです。すぐに祖母の姿が浮かびました。そして、この言葉ですべての過去の出来事がつながりました。意図せず私はその場で涙ぐんでしまいました。そして思いました。「そうか。あれは病気だったのか。」「あの言葉と仕打ちは悪意からじゃなかったんだ。僕が悪かったのでもなく、祖母が悪かったわけでもない。あれは病気だったんだ。」そしてその時、今までとは全く違う思いが私の中に湧いてきました。「もしかしたらおばあちゃんを赦せるかもしれない。」そう思いました。

その日から、主の祈りの時にはおばあちゃんの姿が変わらず浮かびました。ですが、以前とは変わったことがありました。それはおばあちゃんの顔が浮かぶたびに「神様赦せるようにしてください」と祈るようになったことでした。大きな変化でした。自分でもそう思えることが不思議でした。ですが、まだ赦せませんでした。何故ならおばあちゃんが病気だということを知り、おばあちゃんことを理解することはできたのですが、おばあちゃんから受けた痛みは未だに残っていて、まだその苦い思いが依然としてあったからです。

去年の出来事でした。体調を崩してお休みを頂いていた時のことです。私は自分の信仰の原点はどこにあったのだろうかと考えていました。そして、今までの自分の信仰の歩みを振り返ってみる機会を持ちました。私はクリスチャンの家庭に生まれ、高校二年生の時、信仰告白をしました。今までその信仰告白の時を自分の一つの信仰の起点だと思っていました。ですが、本当に私が神様と

人格的出会い、心から神様を信じたのはいつなのだろうかと考えるようになりました。

過去を少しずつ少しずつさかのぼり、振り返りました。

そして気づきました。驚きました。私が初めて心から神様を求めて切に祈ったのは、まさにあの小学一年生の時でした。そして、毎日怯えながら縮こまっていた私の心に、生きていく力と希望を与えてくれたのは、教会学校の先生たちの聖書の話でした。特に兄たちから売られてエジプトで奴隷となったヨセフの話は、本当に日々を生きる力と希望になりました。一人ぼっちなヨセフに神様がともにおられたということは、私にとって大きな希望でした。そして教会学校の先生たちは、私を子供聖歌隊に招いてくださいました。思い出しました。あの時、教会に行くことが楽しみで楽しみでしかなかったこと、そして神様に歌うことが本当にうれしくてうれしくて仕方なかったこと。あのどん底の日々の中で、イエス様は私に会いに来てくださったんだ。あの苦しかった時だけど、私はあの時人格的に神様に会わせて頂いたんだ。そう気づくことができました。

今まで祖母との時間は、思い返すと苦しさ以外の何も覚えることがなかった私の闇でした。しかし、この時だけは今までとは違いました。この時私はこの過去の日々を振り返って感謝していたのです。今まで決して感じたことのない気持ちでした。そして知りました。神様は私を癒やしてくださったのです。主が私の心の闇を照らしてくださった不思議な体験でした。

3. 光は闇の中に

ヨハネ1：5「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった」

光は闇の中に輝いていると言います。遠くから照らしているのではありません。闇の中に降りてきた光です。クリスマスの主イエス様は、闇の中に来られ、闇の中で輝く光です。そうです。主イエス様は私たちの闇を照らしてくださるのです。

私たちのうちには闇があります。しかし、闇は光に打ち勝たなかったのです。闇はすでに敗北宣言を受けたのです。私たちのうちには未だに闇がありますが、消えていくことが決まっているのです。何故なら、闇を消し去るお方が来てくださったからです。私たちの過去の痛み、後悔、どうにもすることもできず未だ私たちのうちにある闇を主が取り扱ってくださるというのです。

「いや…私にはそんなことはないだろう。」「いや、私は神様から遠い人間だから…」とっておられる方がいらっしやるのでしょうか。クリスマスにお生まれになったイエス様のもとに招かれたのは、身分の低い夜間労働者の羊飼いたちと、遠い東の国から、長旅をつづけてきた星の博士たちで

した。彼らは社会の端の端にいる人たちでした。イエス様の誕生に招かれたのは、イエス様からもっとも遠いとされている人たちだったのです。クリスマスは、神から遠かった者たちが近くされる時です。「いや、私には…」とと思っているあなたにこそ、主イエス様は来てくださって、豊かに照らして下さいますよ。

特に聖書のみことばを通して照らして下さいます。みことばによって、私たちに気づかせて下さいます。先日、森の学園の聖書の授業がありました。ここでもこのヨハネの1章5節のみことばから授業をしました。授業後には、いつも子どもたちから感想や質問を書いてもらうのですが、これがすごいのです。子どもたちの応答は本当に素直で率直な応答であり、そして面白くてユニークです。何よりも教えられることがたくさんありますね。授業中は私が彼らの先生ですが、授業後は彼らが私の先生なのです。このような学園があること、そして自分らしく生きる子どもたちと素晴らしい先生方が与えられていることは本当に豊かな恵みだと思います。

先日の授業で、学生が書いてくれた応答を一つご紹介します。小学生の子がこんな誠実な応答をくれました。「ぼくが思ったのは心の中のことです。やみはあくまのささやき、光は神のみことば。あくまのささやきは神のみことばにまけます。ぼくもそんな心になりたいです。」

キリストの光が今も私たちが照らして下さっていることを実感しましたね。

「悪魔のささやきは神のみことばに負けます」という言葉に私自身確信を与えられましたね。何よりも、「僕もそんな心になりたいです」という告白に心震えました。清らかで、誠実な願いに深く感動しました。

私たちがそんな心になりたいですよ。なれますよね。だってイエス様の光は、今も私たちの闇の中に輝いているのですから。その光は闇に勝ったのですから。きつとなれるはずですよ。

少しずつです。ですが必ず照らして下さいます。

長い道のりです。ですが私たちのすべてを照らして下さいます。

ともに期待して歩んでいきましょう。

< 祈り >

■応答賛美 教会福音讃美歌 75「静かに眠れるベツレヘムよ」

■転入式(第3)

■紹介と報告

■頌栄 2020年テーマソング

■祝 祷

- 後 奏 -

■第一礼拝 終了後 転入式 (洪 師)